FD NEWS
甲南FDニュース
No.15

INDEX

1 甲南らしい主体的な学びの実現を目指して
2 学外FDセミナー参加報告
3 FDワークショップ報告

発行:甲南大学FD委員会　2015年3月

1 甲南らしい主体的な学びの実現を目指して

◆経済学部「プロジェクト・ゼミ」の挑戦

学生の主体的な学びを実現するための新しい取り組みのひとつが、経済学部で今年度後期に開講した「プロジェクト・ゼミ」だ。同学部の寺尾建教授と柘植隆宏教授の２名が共同で２年次生 32 名を担当した。

15 回の授業の前半と後半で、異なる２つの課題が、企業経営者から「業務命令」として提示された。学生は４名一組で課題に取り組み、11 月と１月にその成果を発表した。成果発表の場にはそれぞれ、課題を提示した鳥井信吾・サントリーホールディングス副会長と山口信二・モロゾフ社長に参加していただき、成果発表は一般公開のプレゼンテーション形式で行われた。

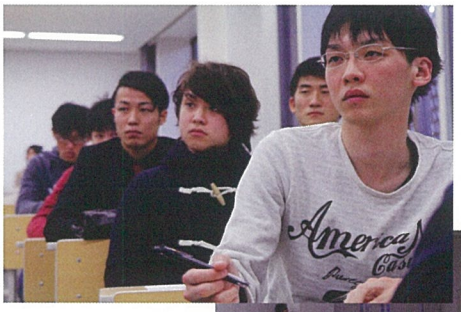
この授業は、一見すると、これまでにもあったような産学連携型の授業である。しかし、「主眼は専門家の執筆した文献を探して読み解くことの重要性や、座学の不可欠性に学生自身が気づくことにある」と寺尾教授はいう。体系的かつ主体的に学習するという基礎的な知的技能を身につけ、経済学部での今後の学修の方向性を学生が自ら発見していくことが目指されている。本ゼミは、２年次生が対象である。４年間を通じて体系的な学びを実現するためには、学生の日常的な学修状況が比較的把握しにくい２年次のカリキュラムを充実させ、学ぶ習慣を身につけさせておく必要がある。そのために本ゼミは導入された。担当教員は２名で、専門分野や学生に対する指導において役割が分担されている。たとえば、２名の教員が専門的に異なる見解を示すことで、学生には「どちらが正しいのか」という葛藤が生じる。そのとき、主体的に対処するという経験が重要だ。２名による指導は、学部を挙げた組織的な教育にもつながる。

本ゼミは、来年度も同様の形式で前期に開講される。成績を評価するにあたっても、いわゆるルーブリック評価を用いた新たな方法を試みる予定だ。

「学生の成長はめざましかった」と寺尾教授と柘植教授は口をそろえる。学生から思いもよらない質問が投げかけられることも少なくなく、「研究者としての力量が常に問われた」という。他学部にも参考になる先進的な取り組みである。ノウハウを全学で共有したい。

◆「プロジェクト・ゼミ」発表会レポート

「プロジェクト・ゼミ」の最終回にあたる公開プレゼンテーションでは、山口氏からの課題「女性が活躍しやすい社会」に関するグループワークの成果が発表された。発表は、ワーク・ライフ・バランス、企業内制度、行政サポートなど、複数の視点からの考察や発案が纏められており、聞き応えのあるものであったが、特に印象的であったのは、山口氏が、課題の提案からプレゼンテーションへの出席、講評、学生との討議に至るまで、企業人の視点から鋭くかつ温かく教育に関わられていたことであった。受講者 32 名が８チームに分かれ、その代表者が発表を担当したが、全員が一丸となって発表に臨んでいる雰囲気が感じられた。これは、山口氏から大変良い刺激を受け、全員が主体的に課題に取り組んできた証左であろう。また、授業設計や教育効果以外では、履修に際しての意気込み（学生たち自身の前向きな言葉）を纏めたリーフレットが作成・配布されるなど、学外に対する訴求力について考慮されている点も大変参考になった。



コラム　ルーブリック評価って何？

ゼミ・演習・実験など、「思考・判断」「関心・意欲・態度」「技能・表現」などが重要視される授業科目では、ペーパーテストに代わる評価方法が必要となることがある。そのような評価法の一つとして、2012 年８月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（略）」では、ルーブリック評価が挙げられている。ルーブリック評価とは、評価指標（具体的な到達目標）と、評価指標に即した評価基準（達成度と評点）のマトリクス（配点表・右表）を用いた成績評価方法のことである。具体的な到達目標と、それぞれの項目についての採点基準が学生に対してあらかじめ明示されるため、成績評価が公平で客観的かつ厳格に行われるとともに、学生自身の学修計画にも役立つとされる。

調査研究型演習科目のルーブリック（例）

評価指標	評価割合	目標と評価			
		4	3	2	1
1. 課題の設定と説明	20%	論点や問題が明確に記述されており、表現にも問題が無い。	論点や問題がある程度明らかにされているが、表現に問題がある。	論点や問題が述べられてはいるが、境界や背景が明らかでない。	考察されるべき論点や問題が、明らかでない。
3. 根拠資料	15%	質・量ともに十分な情報が、批判・検証を経ながら取得され、考察の展開や結論のサポートに満足に機能している。	質・量ともに十分な情報が取得され、考察や結論のサポートに活かされているが、情報が無批判に受入れられている。	情報がある程度取得されているが、考察や結論の裏付けには十分に活かされていない。	考察や結論を裏付けるのに十分な情報が取得されていない、もしくは、情報の出所が不明あるいは不適切である。
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
7.プレゼンテーション（資料）	15%	正確な情報が論理的に並べられており、論旨が理解しやすい。	大部分の情報は正確で、分かりやすくて論理的に並べられている。	論理的な構成に努めてはいるものの、情報の選択や並べ方に不適切な箇所がある。	情報の並べ方には論理性が伺えず、論旨が伝わらない。
8.プレゼンテーション（発表技術）	5%	聴き手の方を向き、適宜資料を指しながら、明瞭な話し方がされている。	話す際の姿勢、資料の指し方、話し方などに、やや不十分な点がある。	話す際の姿勢、資料の指し方、話し方などに、大きな問題があり、伝えようとする努力が見られない。	明らかに準備不足であり、口頭発表の体をなしていない。

2 学外 FDセミナー参加報告
立命館大学教学実践フォーラム

2014年12月18日開催の第４回「Assembly for Peer Supporters(APS)2014」、2015年1月14日開催の第5回「学びの場で活躍するピア・サポーター - 学生と教職員が協働してつくる、学びのコミュニティー」、これら２回のイベントに参加した。ここでは、右表のような多くの分野において、全学生の 10%前後のピア・サポーターたちが活躍していることが報告された。

フォーラムでは、活動内容と現状における課題について、実際に活躍しているピア・サポーターたちが報告した。元気な彼ら彼女らの社会人と変わらない受け答えの様子には驚かされた。

立命館大学の学生サポーター

支援内容	名称（立命館大学内の独自のものも含む）
学習支援	オリター団、ES(教育サポーター)、学生 FD スタッフ、ティーチング・アシスタント
新入生支援	オリター団、エンター制度
キャリア支援	ジュニア・アドバイザー（キャリアセンター）
留学支援	GGP 学生支援団体まいる、留学アドバイザー、留学生チューター TISA(国際教育センター)
学生への広報	学生広報スタッフ（広報課）
ボランティア活動	学生コーディネーター（サービスラーニングセンター）
障害学生支援	障害学生支援室サポートスタッフ
施設管理	D-plus(産業社会学部)、学生ライブラリースタッフ（図書館）、RAINBOW STAFF(情報基盤課)
オープンキャンパス支援	入試広報学生スタッフ

お知らせ

「【FD】学外セミナー等のお知らせ」メールについて

先生方には、このタイトルのメールを不定期に送信させていただいております。
このメールでお送りしたイベントへの参加にかかる旅費は、大学企画室で手当て可能です。
校務等ご多用とは存じますが、ぜひとも、学外のイベント等への参加をご検討ください。

3 2014年12月13日開催 FDワークショップ報告

◆Google Apps for Education を活用した教育

講師：ミカサ商事株式会社 藤綱 達哉氏

Google Apps for Education は、メール・カレンダー・サイト・ドキュメント・スプレッドシート・プレゼンテーションといった、Google 社が Web 上で無償提供するアプリケーションを活用するものだ。一般のサービスと異なる点は、大学単位でユーザ管理を行う事が可能であり、アカウント発行（メールアドレスの付与）などが柔軟にできることである。

インターネット環境があれば どこからでも利用でき、パソコン、スマホ、タブレットなど端末を選ばず使える統合型のオフィスアプリと考えられ、ファイル共有機能を活用すると、複数人でインターネット上に保存した同じファイルを同時に編集できる。このため、プロジェクト型などグループ単位で活動する講義スタイルにおいて、発表資料を作成する際に活用できそうだ。これら機能の多くは、一般のユーザでも利用でき、既に本学でも、学内外の方と協力して研究や仕事を進める際に、情報共有ツールとして活用している事例があるようだ。便利さとセキュリティー問題の二律背反の課題は残るものの、これらの特性を理解して活用することで、効率的な学習に結び付く可能性を感じた内容であった。

◆Reflective Teaching

講師：マネジメント創造学部 ジョーンズ・ブレント教授

「先生とは…」、「私が先生になった理由は…」、「先生にとって大変なのは…」、「よい先生とは…」、「私の生徒の良いところは…」、「私の生徒の悪いところは…」、「私が生徒に期待することは…」、「私の尊敬する先生は…」など、次々に提示される題目について、「…」の部分を参加者全員が即座に各々紙に書き記し、その後、互いにそれを見せ合いながら意見交換をするというものであった。最初と最後の題目が「先生とは…」となっており、複数の題目に順に回答していく中で、自然に、「先生とは何か」あるいは「先生はいかにあるべきか」という点について、自らの経験（生徒との関わり）を踏まえつつ、自己の考えを再確認するという構成になっていたように思う。表現の仕方に多少の差異はあるものの、「先生」という存在には、「継続的に学び続ける姿勢」、「(何らかの) 変化」が必要と感じている参加者が少なくないように見えた。

テーマの意義を、言葉ではなく、実践することによって体感させるものであると同時に、通常は表に出しにくい（と思われる?）参加者相互の意見も知り得た、たいへん新鮮で有意義なワークショップであった。

さらに詳しい情報・報告はホームページへ！

大学トップ ▶ センター・研究所・図書館 ▶ FD ―甲南大学の FD への取り組み―

問い合せ先
FD 委員会では FD 活動や FD ニュースについてご意見・ご要望を受け付けています。
大学企画室　TEL078-435-2592(内線 2812)　FAX078-435-2306　MAIL kikaku@adm.konan-u.ac.jp